

陳情第1号加齢性難聴者の補聴器購入に対する公的助成制度の創設を求める陳情に、賛成の討論に参加いたします。

この加齢性難聴者への補聴器の助成を求める類似した陳情は、私の記憶では3回目になります。1回目の陳情の際、私は反対の討論を行いました。理由は、補聴器自体の多寡にかかわらず、御自分の聞こえの調整には、時間と練習が必要であり、補聴器の調整は難しく、周囲のサポートも必要になること。この調整がうまくできず、結局は補聴器を使いこなすことが難しく、諦めてしまうケースが少なくないことなどを理由に、反対しました。しかし2回目の陳情では、聞こえは、日常生活に大きく関わることで、また聞こえないことで、家族や周囲とコミュニケーションが取れず、孤立しがちな状況をつくってしまうことを避けるためには、補聴器の使い方を十分理解して使いこなしていこうとする方々がいるのであれば、その一助となるような公的助成の必要性を考え、賛成することにいたしました。しかし、再度申し上げますが、補聴器を使えば、すぐにクリアに聞こえ、難聴が解決するわけではないようです。調整を繰り返し、努力も必要であることを踏まえながら、最初から難しいからと決めつけるのではなく、生活の質の改善、認知症の危険因子となる難聴の補助的な支援が必要ではないかと考えます。

他市の取組を研究し、補聴器の助成制度を行っている自治体の、認知症発症率が抑えられているなどというデータを見つけることは、難しいかもしれません。

しかし、皆さんも耳が遠くて、周りから孤立してしまったり、寂しい思いをされている方を見かけたことはありませんか。

家族や周囲から、どうせ、聞こえてないんでしょう、聞こえていないから、話がかみ合わないんだよ、聞こえているふりをしているだけだよ、都合の悪いことは聞こえないんだよなあ、などと。聞こえない本人にとっては、どれだけ悔しく、寂しい思いをされていることでしょう。大勢の中で暮らしていても、一人孤立してしまうことのつらさから、自らコミュニケーションを控えてしまうようになれば、心にも影響するし、聞こえ自体も悪化します。認知症の場合は、リスクは高くなります。

私たちもいずれ行く道かもしれません。周囲の難聴者への接し方も併せて、この新たな公的制度を創設することを、野田市の新たな取組として進めていただきたいと申し上げ、賛成の討論といたします。